ある明治人の風景
—思想に殉じるということ—

塚谷周次

明治41年4月2日の午後、徳富蘆花の寓居を「妙な爺さん」が訪ねてきた。蘆花は、パレスチナ経由でヤスナヤ・ポリヤナのトルストイを訪問して帰国した翌年の40年に、武蔵野の一隅にカナンの地を求めて転居していた。自ら言う美的百姓としての新生活に一歩を踏み出していたのである。

この時、蘆花は41歳、「妙な爺さん」は79歳。わざわざ武蔵野の茅屋を訪ねてきた老翁の名は、かつては関寛斎の名で世に知られた医家で、このころは関寛と名乗っていた。蘆花の『みみずのたはこと』には、関寛斎のポートレートをつぎのように描いてある。

> 鼠の眼の様に小さな可愛い眼をして、十四五の少年の様に紅味ばしった顔をして居る。長い灰色の髪を後ろに撫でつけ、顎に些の疎髯をヒラヒラさせ、木綿ずくめの着物に、足駄ばき。

蘆花は、突然にやって来たこの頑健な「妙な爺さん」を初対面でいっぺんに気に入ってしまう。北海道の開拓牧場からやってきた寛斎と人気作家の蘆花の二人は、たちまち意気投合したのである。蘆花は、人見知りのする男だったけれども。そうしてこの日から、『自然と人生』や『不如帰』のベストセラー作家と親子以上にも年齢差のある「妙な爺さん」との濃密な交遊が始まることになる。

1

１８３０年（天保元年）、関寛斎は、吉井佐兵衛、幸子の長男として上総の国山辺郡中村在に生まれた。14歳のとき、生母の姉の嫁ぎ先である関家の養子となる。当主の関俊輔は、素寿と号する儒学者だった。だから、百姓に生まれた寛斎は、関家の人となることにより、図らずも土と離れた人生を歩むことになるだろう。

嘉永元年の19歳の時、佐藤泰然の佐倉順天堂の門を叩く。佐藤泰然は、はじめ高野長英に学び、やがて3年余の長崎留学で蘭学や蘭方医学を修める。佐倉藩主の招聘を受けて佐倉に移住し、城下で順天堂と称する蘭学塾を開いた。佐倉の順天堂は、寛斎が入塾した頃は、大阪の緒方洪庵の適塾と並び称される名声を博していた。多くの俊英たちが佐倉順天堂に入塾してきたが、その中にあって、寛斎はめきめきと頭角を現す。順天堂が行っていた外科手術は、他の追従を許さない卓絶したものだったが、21歳の寛斎がまとめた『順天堂実験録』（嘉永3年）はその貴重なレポートであり、同時にまた順天堂に占める寛斎の位置を語るものでもあるだろう。

寛斎は、27歳になって、銚子荒野で開業する。すでに23歳の時に君塚あいを娶っていた。やがて銚子の醤油醸造家の7代目を継いだ浜口梧陵を知る。

31歳の時、浜口の助言と資金援助により、勇躍長崎に赴く。師の泰然が行き、師の師である高野長英が学んだ長崎である。夢にまで見た憧れの長崎留学。長崎行の3年前にはオランダ軍医ポンペ・フォン・メーデルフォルトが幕府の招聘で来日し、すでに医学伝習所を開設していた。しかもそこでは、師の佐藤泰然の次男松本良順が、幕命により医学伝習所の副校長格を勤めていたのである。この伝習所

で、正味1年間、寛斎は身を削るような研鑽を積んで、文久2年に江戸に帰るが、たちまち徳島藩主蜂須賀斉裕の典医に就任することになる。新知識の蘭方医は、引く手あまただった。

徳島に転居してからは、典医としての平穏な暮らしを送るが、明治維新に際しては、大総督府から奥羽出張病院頭取に任じられ、野戦病院長として各地に転戦した。一方、2歳年上の松本良順は長崎から帰還して幕府の医学所頭取の要職に就いていたが、戊辰戦争が勃発するや、幕軍や奥羽越連合軍の医師として戦場を駆け巡っていた。戊辰戦争は、親しい二人の男の仲をも引き裂いたのだった。松本良順は、戦後逮捕され収監されるが、間もなく許されて官途に就き、累進して初代の軍医総監となる。明治という時代には才能を無駄にする余裕はなかった。

寛斎もまた、戊辰戦争後の数年間は、地元の徳島の医学校創立に関わったり、乞われて海軍省に出仕したりしている。しかし、明治6年に山梨病院長を辞して徳島に帰還してからは、家禄・士籍を返還して、一介の町医者となってしまう。百姓に生まれた出自に立ち返ったと言うしかない。土に回帰したと言ってもよい。

この辺の事情について、盧花は、「順に行けば、軍医総監男爵は造作もないことであったろうが、持って生まれた骨が兎角邪魔をなして、上官と反りが合わず、官に頼って事をなすは駄目と見限りをつけ」(『みみずのたはこと』)たと見る。知己の弁だろう。寛斎もまた、陶潜が故山に帰還する心境を賦したように、「帰りなんいざ、田園まさに荒れなんとす」の人であった。

しかし、寛斎という人の面白さは、市井の中の安住の地に隠棲することを潔くしない、というところにあるのかも知れない。徳島に帰った寛斎は、文字通り医は仁術を実践する日々を30年ほども送り、徳島の人々から絶大な尊敬を寄せられたのだが、他方では、気が向けば屢々旅に出て、見聞を広め、盧花訪問がそうであったように、これと見込んだ人々の門を叩いては交遊した。ちょうど幕末期の草莽の志

士たちがそうであったように。

幕末期の志士たちといえば、大久保利通は同年、木戸孝允は3歳、坂本龍馬5歳、それぞれ年下だ。つまり、寛斎は彼らと同世代なのだ。彼らと同じ時代の思想的空気の中で育った。勤王攘夷やアンチ幕府運動の志士たちは、順天堂の塾生たちからも出たし、長崎の医学所出身者からも出た。そういう時代だった。それに、志士たちの出自は、軽輩の士分や百姓（郷士）出身者たちがメジャーだった。医師も少なからずあった。しかし、寛斎には政治とあい渉った気配はない。尊王攘夷という一時代を大きく動揺させたイデオロギーとは距離をおきながら、寛斎は、脇目もふらずに医学に打ち込んだように見える。

では、寛斎はディレッタントか。これには、ノーというほかない。幕末の志士たちと同じように、寛斎も溢れるような志を持っていた。彼らとの違いは、その志が、彼らのように政治に向かわなかっただけのことだ。寛斎は、彼らと同じ空気を吸いながらも、政治の代わりに医学に没入したのであって、そのころの寛斎には、政治と医学は等価だった。

2

寛斎夫婦は、安定した徳島の生活を切り上げて、津軽の海を渡る。20世紀になったばかりの明治35年の、ようやく雪解けが進んだ4月に。北海道という北方のフロンティア開拓に余生を捧げようと決断したのである。73歳になる男にしては、尋常ではない。

寛斎夫婦は8男4女を成したが、7子を失っている。4人の男子のうち3人には医学教育を受けさせたが、7男の又一には札幌農学校を勧めている。又一が札幌農学校に入学したのは、明治25年。だか

ら、遅くともこの頃には、北海道開拓の青写真を、寛斎は膨らませていたはずだ。

じつは、北海道開拓と寛斎が禄をはんだ徳島藩とには、濃密な関係がある。最初は明治4年という早い時期に、徳島藩淡路城代家老の稲田邦植主従137戸546人が日高の静内に入植し、日高馬産地の魁となったこと。もう一つは、寛斎の入植時、すでに空知地方には広大な蜂須賀農場があり、着実に成果をあげていたことだ。寛斎は用意周到な性格の人だから、北海道入植を決断するまでには、先行の同藩入植の情報をつぶさに収集していたに違いない。

さて、又一は卒業論文に「十勝国牧場計画」を書き、寛斎夫婦の渡道前に、十勝国中川郡本別村字斗満の地に未踏の原野3百萬坪の貸付け許可を得ていた。今の陸別である。北海道有数の酷寒の地だ。明治43年、寛斎は『関牧場創業記事』一巻を記述[1]している。

> 身体健康且つ僅少なる養老費の蓄へあり。これを保有して空しく楽隠居たる生活（を）し、以て安逸を得て死を待つは、これ人たるの本分たらざるを悟る事あり。（中略）それ我が国たるや、現今戦勝後の隆盛を誇るも、然れども生産力の乏しきと国庫の空なるとは、世評の最も唱ふる処たり。依って我等老夫婦は北海道における最も僻遠なる未開地に向ふて我等の老躯と僅少なる養老費とを以て我国の生産力を増加するの事に当たらば、国恩の満々分の一をも報じ且つ亡父母の素願あるを貫き、霊位を慰する（後略）

（1）寛斎という人は、書斎の孤独を愛する人でもあった。書を読み、著述をして、短歌という文学形式に己の感懐を表白することが好きである。トルストイや老子、旧約聖書は、座右の書だった。代表的な著書は、『命の洗濯』。養生・健康論を説き、早くも予防医学の必要性を語っている。紀行文なども表わし、書くことの好きな人であった。

73歳の寛斎を、北方のフロンティア開拓に駆り立てたものは何か。寛斎は、その思いを平明実直に述べる。言葉は比較的抑制されている。しかし、身をよじるような憂国の思いが、行間から澎湃として立ち上がっている。この国の将来を思うなら、安閑として楽隠居などはしていられない。明治の近代化は緒に就いたばかりで、日露の戦争に勝利したとはいえ、国力は消耗し、生産力は乏しい。この老躯と蓄えのすべてを、あえて僻遠のフロンティア開拓に投じることで、この国に生まれた者としての責務を果たさなければならない。[2]

この居ても立っても居られない寛斎の国に対する焦燥感は、時代を共有した幕末期の志士たちと変わらないと言ってよい。国を変革しなければならない。黒船という外圧が直接的な引き金になったにせよ、志士たちは、そういう志をひっさげて東奔西走した。明治という時代は、基本的には、その延長上にあった。

国を変革するということは、さしあたり、天皇が政権を回復するということにほかならない。だから、明治天皇は、この時代の空気を象徴する存在となった。つまり、明治天皇とは、この時代のイデオロギー[3]そのものだった。

医をもって国に奉仕してきた寛斎が、なぜ聴診器を鋤鍬に代えたのか。さまざま解答があり得る。たとえば、司馬遼太郎は、「医とは、結局まやかしにすぎない。という思想に全身をさらわれたのではないかと仮に思ったりする」（『胡蝶の夢』）と推し量る。寛斎という人は、医師としての研鑽を積み重ねるほどに、臨床医学よりも予防医学の方に傾いた医家であり、またその実践者だった。厳寒の入植地でも、凍結した川での水垢離を欠かさない人なのだ。司馬の推測は、この延長線上にあるとは云えるだろう。

先に、松本良順に触れた。良順は、寛斎とは順天堂の同門だが、戊辰戦争では敵味方に袂を分かっ

た。良順は、やがて明治政府に仕えて、軍医総監、貴族院議員、男爵に登り詰める。良順という人も、寛斎と同じように、幕末動乱の空気を吸い、明治天皇という思想を共有した。精神のありようから見れば、良順と寛斎は双子のように似ている。しかし、社会的ありようなら、双頭のヤヌスに比せるかもしれない。寛斎は、家禄も捨てて、ただの市井の人となり、今またそれすら捨て去って、土に帰り、開拓百姓となろうとする。まるで生まれた上総の百姓に立ち返るように。

良順は、志を抱いて官途に就いた。寛斎は、積年の志を抱えて、一開拓民として北方のフロンティアに赴く。ちょっと飛躍して云うなら、この二人の関係は、森鷗外と夏目漱石との関係に似ているのかも知れない。鷗外は、軍人官僚としては軍医総監・陸軍省医務局長に登り詰め、軍務を引退後も、帝室博物館総長兼図書館長（高等官一等）、帝国美術院院長などを歴任する。さて漱石と云えば、一高・東大の教職をあっさりと捨て去って、朝日新聞お抱えのただの物書きになり、文部省からの文学博士号授与の話も、さっさと断ってしまう。鷗外は違う。鷗外森林太郎は、医学博士にして文学博士。漱石は無位無官の物書きという、市井の人として死んだ。

ついでながら、臨終の鷗外は、親友の賀古鶴所に遺言を筆記させている。「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス（略）墓ハ森林太郎ノ外一字モホル可ラズ」。森家の当主として、輝かしい栄達の道を

（2）「創業」の発意が奈辺にあったかを自ら述べるこの文章には、日露の戦争後に書かれた故に、戦後の述懐も混在している。しかし、大筋では「創業」当初の発意を述べたものとしてよいだろう。なお、この文章は、「創業記事端書」から抜いたが、冒頭、左記の短歌が掲げられてある。

世の中をわたりくらべて今ぞ知る
阿波の鳴門は波風ぞ無き

（3）明治天皇という思想、寛斎における天皇もまた、そういう存在だった。渡道の前年に、著書『命の洗濯』を天皇に献上している。仲介者は、小杉榲邨。徳島藩陪臣で、内務省に出仕し、また古典学者として名を成した。

歩んできたかに見える鷗外も、生涯を閉じるにあたって、身にまとってきたどっさりの勲章を捨ててしまいたいという。無冠の森林太郎として、せいせいした気分で死を迎えたい。鷗外という人の生涯もじつに起伏や陰影に富んでいる。

3

事前情報をよく収集していた寛斎は、開拓のトレーニングとして、穀物蔵に居を移して、「最下等の生活」まで試みている。しかし、原野や原始林の開拓地の苦労は、寛斎の想像力をはるかに越えていた。『関牧場創業記事』には、辛酸を極めたトマム（陸別）開拓の日々が記録されている。たとえば、入植した翌年の明治36年には、雪害のために馬40頭あまりを失い、更につぎの年には、馬50頭以上を疫病で失う、というように。

寛斎は、開拓の最初期に、最愛の妻あいに先立たれる。寛斎は、あいの手織りの木綿しか着用しなかった夫だった。寛斎は慟哭した。鬱状態にまで落ち込む。

秋の夜の俤うつる夢さめて
　ねやにただきく川風の音

山さとの訪ふ人もなき一つ家に
　だれに聞けとてきりぎりすなく

あいの遺言は、感動的だ。あいは札幌で病死する。自分の骨は夫の骨と一緒にトマムの牧場に埋めて、草木を養い、牛馬のこやしにせよ。香料は、海陸両軍費に寄付せよ。それが、あいの遺言だった。あいという人も、「私」というものに対する執着心が薄く、「公」に対する奉仕の志が強い。

『関牧場創業記』によれば、心身ともに落ち込んだ寛斎を手厚く励ましたのは、藻岩村（豊頃）の二宮尊親だった。尊親は寛斎の崇敬する尊徳の孫。明治29年、42歳のときに北海道入植を決断する。37年に寛斎が訪れたときには、すでに農場としての骨格を形成していた。20日間ほどの滞在は、糟糠の妻の死によって打ちのめされていた寛斎を立ち直らせる。

寛斎が徳富蘆花の門前にその飄々とした姿を見せた明治41年といえば、トマム入植の6年後であり、悪戦苦闘のトンネルを抜けて、ようやく関牧場の経営が軌道に乗り始めた頃だった。寛斎は、蘆花にトマム行を強く勧める。

蘆花が、妻愛子と娘の鶴子の3人で、トマムの関牧場を訪れたのは、明治43年9月24日のことである。ちょうど網走線の池田・陸別（トマム）間が開通した、翌々日に。

網走線は、利別川流域の集落を結ぶ。池田、本別、足寄、陸別。寛斎が入植した頃は、道なき道を辿り、ところどころは舟運に頼った。それが、10年もしないうちに、鉄路がきたのである。関牧場はさらに飛躍する。

じつは、蘆花が北海道を訪れたのは、これが2度目だった。最初は明治36年の8月。このときは、取材旅行でもあった。この年の4月に、旭川師団に所属する若い士官候補生が蘆花を訪れる。小笠原善平。小笠原は、はじめ乃木希典の書生となり、乃木将軍の世話で職業軍人の道を歩み始めていた。大恩ある乃木と自分をモデルにした小説を書いてほしい。それが、訪問の趣だった。蘆花は乃木を好きである。それに、小笠原という青年にも好感が持てた。蘆花は快諾する。小説『寄生木』は、小笠原善平の

悲痛な自死の1年後に、刊行される。

寛斎は、冬には上京し、春には北に帰った。まるで、雁の渡りのように。上京すれば、必ず武蔵野の盧花を訪ねて談論風発を楽しんだ。『寄生木』も話題になったであろう。それは、おそらく寛斎自死の伏線となる。遠からず、乃木希典は明治天皇のために殉死するのだから。

盧花一家は、旭川師団の小笠原善平ゆかりの所々を歩いて、寛斎の待つ陸別にやってきた。関牧場には1週間滞在する。『みみずのたはこと』には、牧場の日常やら周辺の原始林の情景が、生き生きと描かれている。とくに原始林の自然描写は、国木田独歩の「空知川の岸辺」と好一対と言ってよい。

4

漱石の『こゝろ』は、大正3年に朝日に連載された。

> 御大葬の夜私は何時もの通り書斎に座って、合図の号砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去った報知の如く聞こえました。後で考えると、それが乃木大将の永久に去った報知にもなっていたのです。（略）
>
> それから二三日して、私はとうとう自殺する決心をしたのです。

明治天皇の崩御とそれにつづく大喪当日の、乃木希典夫婦の自刃は、世間を震撼させた。その揺れの大きさが、『こゝろ』に鋭く響いている。「私」にとっては、明治天皇という存在は、明治という時代の精神であり、明治という思想そのものにほかならない。先生である「私」は、明治天皇の崩御や乃木の

殉死に動機づけをして、自殺したのである。

一方、乃木の殉死は、鷗外を心底から揺さぶった。事の深浅においては、鷗外が受けた衝撃の方が強かったかも知れない。鷗外は、乃木の殉死を聞くや、一夜にして『興津弥五右衛門の遺書』を書き上げて、乃木殉死から受けた感動の深さを形にする。

ちなみに、明治元年生まれの盧花は、明治天皇崩御のニュースを聞いて、つぎのような感懐を持った。

> 陛下の崩御は明治史の巻を閉じた。明治が大正となって、余は吾が生涯が中断されたかのように感じた。明治天皇が余の半生を持って往っておしまいになったかのように感じた。
>
> （「落ち穂の掃き寄せ」）

当然のことながら、彼らの生や文学はそれぞれに個性的だが、人としての根底には、明治天皇という思想を共有していた、と云えるだろう。社会主義者幸徳秋水らの大逆事件判決に抗議して、「謀反論」[4]を講演したような盧花でさえも。

先にも書いたが、盧花は乃木を好きである。『ゴルドン将軍伝』を書き下ろしたときには、乃木将軍をイメージして書いている。その上、乃木は小笠原善平の恩師であり、『寄生木』のモデルでもある。乃木殉死から受けた衝撃の深さは、はかり知れない。「落穂の掃き寄せ」に収められている「乃木大将

（4） 明治44年、幸徳秋水以下12名の助命運動に奔走し、また第一高等学校弁論部主催の特別講演会で「謀反論」を講演して、政府を攻撃した。

夫妻自刃」の冒頭には、第一報を受けたときの驚愕が直截に述べられている。盧花は感情の振幅の大きい人だった。

余は息を飲んで、眼を数行の記事に走らした。
「尤もだ、無理は無い、尤もだ」
斯く呟きつつ、余は新聞を顔に打ち被うた。

さて、関寛斎である。

83歳の寛斎は、毒を仰いで自死する。それも乃木が殉死した1か月後の大正元年10月15日に、トマムの自室で。僻遠の寒村にも、乃木殉死のニュースは、鉄路に乗って届いていただろう。

自死の背景の一つは、農牧場経営をめぐっての又一との対立。寛斎の考えは、牧場や農場を分与して、関牧場の小作人たちを自作農へと育成することだった。札幌農学校に学んだ又一は、アメリカ式の大牧場経営を推進しようとする。当初から、牧場経営の理念が決定的に違っていた。親子ながら、同床異夢なのだ。父と子の対立は、農場がようやく軌道に乗ることで、却って顕在化してくる。

又一の札幌農学校後輩の有島武郎は、又一よりも2歳年少、札幌農学校には明治29年に入学した。又一は、まだ在学していたから、互いに顔くらいは見知っていたはずだ。有島の父もまた、息子の卒業後のために、ニセコに広大な農業用地を準備していた。

その有島農場を無償で解放して、小作から自作への転換を図って実行したのが、大正11年だった。しかし、有島が農場を小作に開放したのは、社会主義思想の誠実な実践なのであって、寛斎の自立した農民を育成して生産力を高め、国家に奉仕するという志の発露とは、決定的な落差がある。

じつは、関家と同じように、有島家にも農場経営をめぐるツルゲーネフの「父と子」の相克があった。ちょうど逆の関係だったけれども。親孝行の有島は、父の生前には農場を開放する事はできず、搾取階級のブルジョアである自分に真摯に悩んでもいた。それが、父の死によって、父の呪縛から、ようやく解放される。

関家には、資産分与をめぐる家族間の対立も生じていた。これもまた、寛斎の神経に悲しい痛みをもたらした。しかし、このような相克の底辺には、かならず各々の核があって、世代間の価値や思想の対立と関係している。家族間の相克は、通常その縮図なのだ。寛斎は、しみじみとそう思わずにはいられなかったに違いない。

はらからのあらそふ心かへりみよ
この世は修羅のちまたやは無き

先に引いた漱石の『こゝろ』は、「先生」が大学生の「私」に宛てて書いた遺書というスタイルの作品だ。先生は、明治天皇の崩御を明治の精神（思想）の終焉と受け止める。乃木の殉死もこの文脈で受け止める先生は、自分の自死もまたこの文脈で捉えてほしい、と大学生の私に期待する。しかし、先生は、書き足さずにはいられない。大学生の私には、自分の自死の意味づけなどは、とうてい理解できないだろうから。

貴方にも私の自殺する訳が明らかに飲み込めないかもしれませんが、もしそうだとする
と、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。

世代間の断絶。鷗外や盧花やあるいは寛斎が共有していた明治という思想は、大学生の「私」には、もう理解不能なものになっている。新しい価値観を持つ世代が台頭してきている。先生の眼には、それがくっきりと見えているようだ。

アナロジーとして云うなら、『こゝろ』の先生は寛斎で、大学生は又一や孫たちになるだろう。さらに云えば、関寛斎の自死は、『こゝろ』の先生のそれと似ているし、明治天皇に殉じた乃木に似ている。

盧花は、寛斎の自死について書いている。

翁の臨終には、形に於いて乃木翁に近く、精神に於いてトルストイ翁に近く、而して何れにもない苦しみがあった。

人は、なぜ自死するのか。もとより単純な命題ではない。しかし、関寛斎という明治人について云うなら、事情は歴然としているように思われてならない。

辞世

諸ともに契りし事も半ばにて
斗満の里に消えしこの身は

主要参考文献

『関寛翁』「白里研究グループ研究紀要」Ⅱ　昭和56年11月30日
『関寛斎』陸別町教育委員会　平成15年7月31日
『みみずのたはこと』徳富蘆花　大正2年3月
『胡蝶の夢』司馬遼太郎　新潮社　昭和54年11月